

前回(2026年5月号)で述べたように、ダニエル・パリッシュ・キダーがブラジルで直面した中心的な課題の一つは、識字教育を実施するにあたり、ブラジル政府による黒人の読み書き習得を制限する「読み書き統制」という制度的障壁が存在していたことであった。この障壁は単なる教育政策上の問題にとどまらず、奴隷制のもとで白人と黒人とを本質的に隔てられた存在として固定化する歴史的・社会的権力関係の構造に根ざしていた。そして、この構造を揺るがす契機としての奴隷反乱や民衆反乱、あるいは対抗言説としての奴隷制廃止論のいずれかが不可欠であった。

実際にブラジルでは1835年、北東部バイア州サルバドールにおいて「マレー反乱(Revolta dos Malês)」が発生している。これはイスラム教徒の黒人奴隷(主にヨルバ系)による大規模な武装蜂起であり、約600人が隷従からの解放と信仰の自由を求めて白人支配層に対抗した。しかし、この反乱は密告によって事前に察知されたため、当局によって鎮圧され、多数の死傷者を出す結果となった。この蜂起には読み書き能力を持つ奴隷も参加しており、彼らは書簡などを用いて計画を共有していたとされる。そのためこの出来事は、ブラジル政府が黒人層に対する「読み書き統制」を一層強化する契機の一つとなった。

一方で奴隷制廃止論については、1840年代のブラジルにおいては、イギリス社会で一世を風靡したウィリアム・ウィルバーフォース(William Wilberforce)<sup>(1)</sup>を中心とする反奴隷制運動のような潮流は未だ顕著ではなく、そうした思想運動が本格的に展開されるのは1870年代以降のことであった。すなわち当時のブラジルには、奴隷制そのものを体系的に批判しうる広範な社会的コンセンサスは存在していなかったといえる。

こうしたブラジルの実情を目の当たりにしたキダーは、「読み書き統制」という制度的制約からの脱却の可能性を模索しながら、約3年にわたる観察の結論として、ブラジル社会全体が「苦しんでいる」と評価した。そしてその根本原因を、単なる経済的・制度的問題ではなく、「その広大な領土に見合うだけの自由で知的な人々が欠如していること」にあると結論づけている<sup>(2)</sup>。

#### 専門職の不足

まず、キダーが言及する「知的な人々」とは、専門的技術者層を指していた。これは、モノカルチャー・プランテーション経済が発展したヨーロッパ市場向けの換金作物生産の担い手とは異なり、市場革命(交通網の発達・工業化・商業化)の進展と、それに伴う分業体制の構築を担う人々である。彼らの存在によってブラジルは富と力を蓄積し、国家として強大化していくとキダーは考えていた。この点について彼は次のように述べている。

さらに言えば、ブラジルのあらゆる地域において、実務的で勤勉な技術者が十分に不足していることは、最も明白な事実である。このような人々が、出身国を問わず新たに加われば、国内のインフラ整備は大きく進展し、国全体の利益も一層増進されるであろう。(…)しかし、そのような時代が現在の奴隷制度が存続している間に訪れるかどうかは、まったく疑わしい。<sup>(3)</sup>

これは別の観点から見れば、ブラジルにおける独立以来の寡頭支配体制からの脱却の必要性や、300年以上にわたる植民地支配に起因する経済的後進性といった課題の克服、さらには奴隷制に依存した一次産品輸出型経済からの構造転換を示唆するものとも解釈できる。また社会的には、「民衆」が政治的主体として登場する共和主義体制の構築の必要性をも示唆しているといえよう。ただし、当時のブラジル社会においてはそのような共通認識は必ずしも形成されておらず、キダーは何よりも奴隷制こそが技術者不足の根本原因であると分析している。

#### 教育の不備

さらにキダーは、教師や教科書、書物の不足についても言及している。すでに2026年2月号で「学校で何も学んでいない少年」を扱ったが、彼は改めて次のように述べている。

すべての州において、有能な教師が著しく不足していることが嘆かれている。(…)さらに、ブラジルにおける教育の進展を妨げるもう一つの重大な障害は、適切な教科書がほとんど全面的に欠如していることである。(…)学校に届いた新聞や書物は、事実上、公共の財産のように扱われ、手から手へと回される。そしてそれは、人間社会の共通の原理に照らして、誰もが何らかの恩恵を期待することのできるものと見なされている。<sup>(4)</sup>

このように教育環境の不備をキダーは問題視しているが、書物が「公共の財産のように扱われ、手から手へと回される」という状況には一定の背景があった。それらの書物は、識字能力を持つ者によって公共の場で音読されることを前提としていたのである。

実際、19世紀を通じて書物は極めて希少な情報媒体であり、そのため学校内にとどまらず、地域社会において共有される形で利用されることが多かった。その一形態として、「公開読書」という読み聞かせの文化が成立した。「公開読書」は、識字能力の欠如という状況を補完する手段として、多様な社会階層に広く定着していった。それは文学サークルなどでの実践にとどまらず、地方都市の広場などにおいても非公式に行われていた。

キダーはこうした文化の意義を理解していたと考えられるが、同時に彼が構想していたのは、学校における教師による体系的な指導のもとでの教育であったと推測される。なぜなら、「公開読書」ととどまらず、専門的技術者をはじめとする人材育成には、体系的な教育制度の整備が不可欠だからである。

#### [註]

- (1) ウィリアム・ウィルバーフォースは18世紀末から19世紀初頭にかけて活躍したイギリスの政治家であり、奴隷貿易廃止運動の中心的指導者の1人である。彼はイギリス議会において長年にわたり奴隷貿易の廃止を訴え、1807年に同貿易禁止法の成立に大きく貢献したことで知られる。さらに、その後も奴隷制そのものの廃止を目指す運動に関与し、1833年の奴隷制度廃止法の成立にも重要な役割を果たした。
- (2) Daniel Parish Kidder. *Sketches of Residence and Travels in Brazil: Embracing Historical and Geographical Notices of the Empire and its Several Provinces*. Vol. 2. London: Wiley & Putnam, 1845, p. 388.
- (3) *Ibid.*, pp. 391-392.
- (4) *Ibid.*, pp. 394-395.